

感染対策 I 基礎 B での質疑応答内容について

【質問1】

吸引瓶をサイデザイムで毎日浸漬しています。その後、次亜塩素酸ナトリウムでの消毒は必要ですか？

【回答1】

必要です。

サイデザイムは、タンパク分解酵素が配合された洗浄剤であり、器具等に付着した蛋白質・有機物を分解します。浸漬後、約1分で効果があらわれます。その後、十分に洗浄し、消毒あるいは滅菌を行います。

消毒・滅菌の基本として、消毒前には中性洗剤を使って水洗いし、汚れを落とす必要があります。サイデザイムは蛋白分解酵素が配合された洗剤なので汚れが強い場合に中性洗剤の代わりに使用すると良いと考えます。洗浄後に次亜塩素酸ナトリウムを使って漬け置き消毒してください。次亜塩素酸ナトリウムから取り出した後は、すすぎ洗いをして乾燥させます。十分、乾燥させてから再組立を行ってください。

【質問2】

認知症の患者に対して、感染対策が困難な場合はどのように対応したらよいですか
例) 咳が出てマスク着用が困難な場合
例) カーテンの隔離（転倒リスク）が困難である

【回答2】

認知症で、マスクをすぐに外してしまう高齢者がいる場合には、周りの同室者・職員がマスクを着用し対応するとよいでしょう。また、利用者と職員にはインフルエンザワクチン、利用者で肺炎球菌ワクチンの対象者にはワクチン接種を推進することが重要と考えます。

【質問3】

CV用の輸液セットは、7日に一度交換していますが、CVカテーテルそのものは、どのくらいの頻度で入れ替えてもらうべきでしょうか？

【回答3】

血管内留置カテーテル由来感染予防のためのCDCガイドライン2011によると、感染対策を目的とした定期的なカテーテルの交換は不要となっています。そして、不要になった血管内留置カテーテルは速やかに抜去する（カテゴリー1A）となっています。

血管内留置カテーテル由来感染予防のためのCDCガイドライン2011（WEBで閲覧可能）

【質問4】

胃瘻管理について

瘻孔部の保護について、当院ではガーゼを利用して使用したり、こよりティッシュで行われているが、フリーの状態が良いのでしょうか？

浸出液が付着したままで不潔感を感じられます。

【回答4】

造設直後は、滅菌ガーゼなどで保護を行います。安定した頃から、清潔なガーゼ又は『こよりティッシュ』を使います。浸出液がない、不良肉芽がないなど皮膚トラブルがなければフリーでもかまいません。

ガーゼは、マルチフィラメント（燃糸）で浸出液が乾燥しにくいので、『こよりティッシュ』が良いと言われています。また、汚れがある場合はその都度交換するとよいでしょう。

【質問5】

抗生剤使用後に下痢をする患者様が多くいますが、クロストリジウムが必ずあると考
えたらいいのでしょうか？おむつ交換などの対応について教えてください。

【回答5】

※クロストリジウム・ディフィシルはクロストリオイデス・ディフィシルに名称変更
しました。以下CDと記載します。

CDは、抗菌薬関連下痢症・腸炎の主要な原因菌です。抗菌薬の使用により、健全な消化管細菌叢が乱れることでCDが増殖し、CDの出す毒素により下痢が発生します。抗菌薬使用後の下痢の原因が全てCDというわけではありませんが、過去にCD治療の既往がある場合はリスクが高まります。抗菌薬の使用に伴う下痢症に対して、CD感染の可能性を考え対応するのは間違いでは無いと考えます。

CD対策としてオムツ交換時には接触感染予防策が必要です。

- ・おむつ交換時にガウン、手袋を着用する（単回使用の製品が望ましい）
※単回使用のガウンが準備できない場合には単回使用のエプロンを使用する
※他の利用者（患者）と共有するエプロンやガウンは感染伝播のリスクとなる
- ・予防具は居室内で着用し、処置後は居室内で外す
- ・使用した予防具はビニール袋に入れて密封し感染性廃棄物扱いとする
- ・手指衛生は、流水と石鹸での手洗いを行う
- ・接触感染対策は、便が普通の固さになって48時間経過するまで実施し、以降は標準予防策を行う
- ・環境整備は0.1%次亜塩素酸ナトリウムで清掃後、水拭きを行う

【質問6】

CVポートの取り扱いを学習したことがない

【回答6】

CVポートに関する参考資料の一部を以下に記載します。

- ・インфекションコントロール2019.4月号
メディカ出版
- ・輸液・静脈栄養の管理のコツ カテーテル・ポート・輸液組成から感染対策まで
有限会社フジメディカル出版
- ・血管内留置カテーテル由来感染予防のためのCDCガイドライン2011 (WEBで閲覧可能)

【質問7】

MRSAなどの患者があった場合、サービス付き高齢者住宅の職員にどのように説明すればよいですか？

【回答7】

- ・耐性菌の多くは黄色ブドウ球菌や大腸菌など、誰でも体内に持っているような菌が耐性化したものです
- ・病原性が強くなったわけではないので、保菌しているだけでは無症状であり健康被害もありません
- ・薬剤耐性菌は分泌物や排泄物に含まれていることが多いためケアを行った際には衛生的な手洗いが必要です (標準予防策)
- ・薬剤耐性菌の保菌者が感染症の症状を認めており、咳や痰、膿尿、褥瘡、下痢など周囲に広げやすい状態が発生している場合には接触予防策を行います

高齢者介護施設における感染対策マニュアル改訂版 66ページ (2019年3月) より引用
※上記のマニュアルはWEBで閲覧可能な上、とても分かりやすいです